

# ナポレオンのロシア遠征とナロード (民衆)の英雄イメージ

越野剛

本論では 1812 年のナポレオンのロシア遠征に際して、武器を持って立ち上がったとされる農民などの民衆英雄のイメージについて考察する。始めにロシア語のナロード(民衆)という言葉のはらむナショナリズムや眼差しの問題について概念の整理を行う。次にモスクワとペテルブルグという二つの対照的な都市での状況を取り上げて比較する。第一にはモスクワ総督のロストプチンが取り組んだ民衆へのプロパガンダを、第二にはペテルブルグで盛んに描かれたナポレオン戦争に関するカリカチュアを題材にして、愛国的な民衆イメージが作り出される過程を見ていきたい。

## ナロードの概念について

ナポレオン戦争はヨーロッパの西から東にわたる各地でナショナリズムの形成を強く促した。スペインで、ドイツで、イタリアで、ポーランドで、ますます多くの人々が自分は何者なのか、自分の依って立つ場所はどこな由緒を持っているのかについて考え始めた。それはロシアもまた同じである。多大な犠牲を払った対仏戦争が 1807 年にいったん落ち着くと、ティルジット和約の条件が屈辱的と感じられたこともあって、ロシア社会の愛国的な気運はかえって燃え盛ることになった。この時代のナショナリズムの芽生えは歴史意識と民衆への眼差しという二つの方向から観察できる。それらはすでに 18 世紀の教養エリート層の一部に見られたが、ナショナリズムと呼べるほどの広汎な現象ではなかった<sup>1)</sup>。そのためにはナポレオン戦争を待たねばならなかったのである。

一世を風靡した過去の英雄や歴史的事件への関心の高まりは、時間軸に沿って過去にロシア的な自己意識を拡大するものである。13 世紀に侵略してきたドイツ騎士団を撃退したアレクサンドル・ネフスキーや、15 世紀末のクリコヴォの戦いでモンゴル軍を打ち破ったドミトリイ・ドンスコイや、17 世紀始めの動乱時代(スムータ)の終わりに「国民軍」を組織してポーランド人からモスクワを取り戻したミーニンとポジャルスキーなどの名前が、ナポレオン戦争とのアナロジーでたびたび思い出されるようになった。史劇や歴史叙事詩のジャンルが盛んになり、1807 年に上演されたヴラジスラフ・オーゼロフの『ドミトリイ・ドンスコイ』は観衆から熱狂的な賛辞を浴びせられたという。モスクワの赤の広場にあるミーニンとポジャルスキー像の建立が発案されたのもこの時期である(完成は 1818 年)。元来はヨーロッパ文化を自国に移植することに熱心だった文学者ニコライ・カラムジンが、この時期には古文書館にこもってロシア史の研究に熱中するようになる。彼が 1812 年の戦争で中断されながらも書き続けた『ロシア国家史』は、19 世紀を通じてロシアの美しい過去を夢みる愛国

的な想像力に豊富な材料を提供するだろう（刊行は1816～1829年）。

ナショナリズムが生成するもうひとつの契機となったのは、社会の下層にいる民衆への眼差しである。ピョートル大帝の改革以降、著しく西欧化されたエリート貴族層と対照的に、民衆層は伝統的なロシア文化を保持していると考えられたためである。歴史に対する関心がロシア的空間の時間軸をさかのぼる営みだったとすれば、民衆への志向は「ロシア的なもの」を求めて社会的な空間軸を掘り下げていく動きだったといえる。すでに18世紀の後半から民謡や諺などの民衆文化やフォークロアが、知識人によって頻繁に取り上げられるようになっていた<sup>2)</sup>。それはヨーロッパ全土で18世紀末から19世紀にかけてしばしば見受けられる「民衆文化の発見」（ピーター・パーク）とも連動している<sup>3)</sup>。カラムジンが小説『哀れなリーザ』（1792年）で農民娘を悲劇のヒロインに描いて読者を大いに感動させたことも、下層社会の可視化という時代の文脈の中で理解すべきだろう。しかし何よりも決定的だったのは、1812年のナポレオンのロシア遠征における愛国的な民衆のイメージである。その結果として民衆に向けられた過剰なまでの尊敬や期待が生まれ、19世紀のスラブ派から人民主義者（ナロードニキ）にいたる知識人の民衆崇拜、ソ連時代の人民英雄の概念にまでその跡を残すことになる。

ロシア語のナロードは「民衆・人民」を表す一方で、「国民・民族」を意味することもある多義的な言葉である。もちろん英語のpeopleやドイツ語のVolkも同じような二重の意味を持っているが、ナポレオン戦争当時のロシア語にはnationにあたる概念を表す言葉が定着していなかった。そのためナロードを用いた国民の概念はしばしば曖昧になりがちで、新しい語彙の必要性は知識人たちにも意識されていた<sup>4)</sup>。本論ではナロードを専ら民衆の意味で用いるが、ナポレオン戦争の文脈の中ではそれが常にロシア国民という大きな概念に開かれた言葉であったことを念頭に置きたい。民衆というカテゴリーは貴族を除いた社会の下層部分を大ざっぱに含むものだが、19世紀初頭のロシアではほとんどが農民であり、わずかに都市の下層民が加えられる。ただし戦争という文脈では軍隊のヒエラルキーの下部に位置する兵士も無視することはできない。特異な社会集団であるコサックや非ロシア系諸民族も戦争における英雄的ナロードのイメージと重なる部分があるが、本論では特に考察の対象とはしないことにする。

ナロードの意味するものが問題となる点のひとつは、日常言語がフランス語になっているような西欧化した貴族層と対比したとき、民衆こそが伝統文化を代表するもっともらしいロシア人として見えてくることである。少数の支配階級である貴族に対して、ロシアの人口の圧倒的多数は農民であった。しかしながら、その多くは地主貴族が私的に所有する農奴でしかなく、近代的な国民の概念にはとても適合しない状態にあった。ナロードを国民という意味で用いるならば、西欧かぶれの貴族にも奴隷身分の農民にも、その意味には相応しくない性質が露呈されてしまう。19世紀初頭のナショナリズムの高揚はそうした矛盾を剥き出しにする一方で、亀裂のない単一のロシア国民を想像する契機にもなった。ナポレオン戦争では、ロシアの国民が一体となって戦うという意味を込めて、「ナロードの戦争」という言い回しがスローガンのように用いられた。その場合のナロードに貴族が留意されていたかどうかは曖昧である。むしろそれは非戦闘民である民衆＝農民までもが、武器を取って敵に立ち向か

ったという記憶を強調する側面を持っていた。戦争は民衆を国民に向けて引き寄せたのである。

民衆のイメージを考える際のもうひとつの問題点は、ほとんどの場合にそれが貴族の側から一方的に描かれたものだということである。19世紀のロシア農民のほとんどは文盲であり、農奴出身ながら大学教授にまで出世して有名な日記や回想録を残したアレクサンドル・ニキチェンコのような例外を除けば、自ら文字記録を残すことはほとんどなかった。民衆の識字率が上昇し始めるのは農奴解放（1861年）と一連の大改革を経てからのことであり、文盲の問題が最終的に解決するのはソビエト政権下においてである。ナポレオン戦争において活躍した農民について記したテキストは、ほとんどが貴族層に属する同時代の知的エリートの手によるものである。ナロードが書く主体ではなく書かれる客体であったことは留意されなければならない。

戦争は他者である敵のイメージと自己のイメージを明確に分断することによって単一の「われわれ」という意識の生成を促す。ナポレオン戦争におけるロシアのナショナリズムもそのような由来を持っているが、民衆のイメージは他者と自己の間で揺らぐ曖昧さを残し、必ずしもひとつのロシア国民という意識に統合されなかった。戦時中の地主貴族たちは民衆の愛国心を期待するよりも、その反乱をむしろ恐れていたことが知られている。ナポレオン軍に立ち向かう勇敢な農民がいる一方で、地主屋敷が農奴によって焼き払われる事件も頻発した<sup>5)</sup>。ロシアに入ったナポレオンが農奴解放を約束して寝返りを画策する可能性もあった。斧や刺又を持って戦う愛国的な民衆のイメージは、容易に反乱者のイメージにも転化しうる。愛国的な民衆の英雄像が安定したものとして確立するのは戦争がロシア側の勝利に終わってからのことである。ナロードについて語られた言説は、支配階層が抱いた願望と恐怖の両方を反映している。

## モスクワ

1812年の戦争においてナロードがどのように描かれイメージを作られていったのか、モスクワとペテルブルグという対照的な文化的背景を持つ都市にそれぞれ焦点を合わせて考察したい。ペテルブルグは18世紀の始めにピョートル1世によるロシアの近代化事業の一環として新しく建設された都市である。ヨーロッパに向けて開かれた海港であり、バルト地方のドイツ人など非ロシア系住民が多かった。モスクワに代わって首都となったため、官僚と軍人の目立つ制服姿の町でもあった。それに対してモスクワは古くからの都としてペテルブルグに次ぐ位置を与えられ、歴代の皇帝もここで戴冠式を行う慣わしであった。商工業の中心地であると同時に、伝統的なロシアの精神文化を守る気風が強い町でもあった。時の皇帝アレクサンドル1世はフランス啓蒙思想の薫陶を受けて育ったコスモポリタンな性格の持ち主であり、モスクワの保守的な貴族層の間ではあまり人気がなかった。とりわけ1807年の和平に反感を抱く愛国的な不平派は、フランスとの対決を主張して気炎を上げた。その代表格が1812年の戦争中にモスクワ総督を務めたフョードル・ロストプチンである。彼が都市の下層住民や近郊の農民に対して行った政治的プロパガンダは、ナポレオン戦争における

英雄的なナロード像が生み出される過程に大きく関与している。その点について見ていくことにしよう<sup>6)</sup>。

ロストプチンは1763年に中部ロシアのオリョール県で小貴族の家に生まれた。後に小説家トゥルゲーネフが生まれた土地である。パーヴェル帝（在位1796-1801年）の寵臣として権勢を振るうが、宮廷クーデターで皇帝が暗殺されてアレクサンドル1世が即位してからは政府を離れる。しばらくはモスクワ近郊の領地ヴォロノヴォで大人しくしていたロストプチンだが、アイラウでの激戦からティルジットの和約にかけての愛国的心情の盛り上がり組して『シーラ・ボガトゥイリョフ』（1807年）を書き上げる。昔かたぎのロシア貴族がクレムリンの宮殿の前にたたずみ、瞑想の中でフランスを非難する大演説をぶつという作品である。作品は7000部という当時としては破格の部数で発行され、文学者としてのロストプチンの名声を確立させた。『ボガトゥイリョフ』の主人公の台詞には民衆的な語彙やイディオムがふんだんに用いられている。ロストプチンの特異な言語的センスは後にナロードのイメージを操作する彼の政治的プロパガンダに役立つことになった。文筆活動の成功に乗じたロストプチンは、親仏路線を取る国務卿スペランスキーの政府に不満を抱くモスクワの愛国派の中心的な存在に浮上する<sup>7)</sup>。1812年に入って露仏間の対決が避けられなくなると反対派は発言力を強め、5月末にロストプチンはモスクワ総督に任命される。ナポレオン軍がネマン川を渡ってロシア領に進軍を開始するのは6月12日、モスクワを占領するのが9月2日のことである<sup>8)</sup>。

新任のモスクワ総督は「ロストプチンのビラ」と呼ばれる住民向けの宣伝文を自ら執筆した。最新の戦況を簡潔に伝えるだけの号もあるが、その多くは得意の民衆的な言葉遣いでモスクワ住民の愛国心を煽りたてようとするものだった。例えば7月1日付けのビラは、モスクワの町人カルニュシカ・チヒリンが居酒屋で一杯やった勢いでフランス軍の悪口をまくしたてるという内容である。「おしゃれもほどほどにしとけよ、貴様の兵隊はちびの気取り屋ばかりだからな、外套も手袋も脚絆も何もありません。どうやってロシアの暮らしに耐えていこうっていうのかよ。キャベツで腹が腫れて、ソバ粥でペシャンコになって、野菜汁で喉が詰まるって寸法だ。冬に居残ろうってやつは、神現祭の寒波でいちころだ」<sup>9)</sup>。ビラには居酒屋の戸口に立つチヒリンの絵が描かれている（図1）。建物の内と外が同時に見える構図や奥行きのない人物の配置は伝統的な民衆版画（ルボーク）を模したものである<sup>10)</sup>。

戦時下のモスクワで流通していたルボークにはフランス兵を串刺しにする兵士ドルヴィラとグヴォズディラのもの知られているが（図2）、これもロストプチンが出版に関わったとされている<sup>11)</sup>。





【図2】兵士ドルヴィラとグヴォズディラ（1812年）

図3では農民のイヴァン・ドルヴィラが熊手でフランス兵を退治している。モスクワ陥落直前の8月30日に出版されたビラはフランス軍との最後の対決に備えるよう呼びかけているが、そこには図3と呼応するような戦い方が推奨されている。「斧もいいし刺叉も悪くないが、一番なのは三叉の熊手だ。フランス人はライ麦の束ほど重くもないからな」（218）。モスクワはルボーク文化の中心地のひとつであり、有名なアフメチエフ家を始めとする民衆版画の工房が集まっていた<sup>12)</sup>。ロストプチンはモスクワの伝統文化をナポレオン戦争という政治的な文脈の中で利用することに成功した。ルボーク研究の先駆者として知られるスネギリョフは、1812年に赤の広場のカザン聖堂境内でチヒリンやドルヴィラの絵を目撃している。シーラ・ボガトウイリョフを描いた版画もあったという。ロストプチンがこうした民衆版画を巧みに用いてモスクワ住民の愛国心を高揚させたとスネギリョフは証言している<sup>13)</sup>。



【図3】農民イヴァン・ドルヴィラ(1812年)

モスクワ総督のピラの文体に対する同時代人の反応は興味深い。ロストフの商人マラクエフはそれを皮肉たつぷりに「村の百姓女が話す方言」と呼んでいる<sup>14)</sup>。文学者たちもピラに見られる「無作法な言葉」「広場の言葉」を非難する者が多かった<sup>15)</sup>。詩人ヴィヤゼムスキーの回想によると、ロストプチンの家に居候していたカラムジンは、美的とはとても言いかねるピラの文面に困惑して自分が代筆することを提案さえしたという。確かにカラムジンならばモスクワ総督の地位に相応しい流麗な文体で書くこともできただろうが、そうなれば「電気を帯びた荒々しい炎のような力」が民衆を熱狂させることもなかったとヴィヤゼムスキーは予想し、ロストプチンの文体の方に軍配を上げている<sup>16)</sup>。民衆的な粗暴な文体を用いながら都市下層民に働きかけるロストプチンのピラについては、政治的な立場は異なるがフランス革命のジャコパン急進派エベールの新聞『デュシェーヌ親父』との類似を指摘する意見もある<sup>17)</sup>。

ナポレオン軍がモスクワを占領した9月2日の夜に火災が発生し、たちまち全市街が炎に包まれた。ロシア政府がフランス軍による放火とみなす一方で、フランス側はロシア人の「放火犯」を探して処刑してみせ、非難の応酬となった。トルストイが『戦争と平和』(3巻3部26章)の中で露仏双方の意図的な放火を否定して自然発火説を唱えたこともあり、火事の真相については議論が絶えなかった。今日では歴史家タルタコフスキーなどの研究により、ロストプチンがナポレオンに占領される前にモスクワを焼き払う綿密な計画を立てており、少なくとも火事の一部は彼の指令によるものだったことが明らかにされている<sup>18)</sup>。本人は決して認めようとはしなかったが、国外ではモスクワ総督による犯行が通説となっていた。ナ

ポレオンを破るために自国の古都すらも破壊するロシア的な蛮勇の持ち主として、ロストプチンは恐怖のあるいは尊敬の対象にすらなっていた。ロシア国内ではモスクワ大火の犯人はフランス軍だというのが公式見解だったが、やがて民衆（ナロード）の愛国的な放火という説が広がり始める。

興味深いことにロストプチン自身が放火する民衆というイメージに加担している。モスクワ総督は8月13日の警察大臣バラシヨフ宛の手紙で「悪党の手に渡すものか」というのが民衆の意見だと述べ、ナポレオンがモスクワを占領しそうになれば「民衆が町を焼くだろう」と予言している<sup>19)</sup>。1823年に露仏両言語で出版した『モスクワの火事の真実』では大火の主犯をナポレオンと断定する一方で、都市の住民が「誰の手にも渡すものか」という「ロシア的性格」に従い、自らの家に火を放ったケースもあったと書く<sup>20)</sup>。あたかもモスクワ大火の責任を愛国的美談というかたちで民衆に転嫁しているようでもある。ミハイル・ザゴスキンの書いたナポレオン戦争に関するロシアの最初の歴史小説『ロスラブレフ』（1830年）では、愛国心に燃えて火をつけて周るモスクワの商人たちが描かれ、「モスクワ大火の名誉は誰にも譲らない」と語り手自身が高らかに宣言している<sup>21)</sup>。こうしてロストプチン自身の役割は目立たないものとなり、ナロードによる自発的な放火という一種の都市伝説が確立する。

ロストプチンがその成立に寄与したナロードに関するもうひとつのイメージは「農民パルチザン」である。モスクワ総督として発行したビラは専ら都市下層民を相手にしたものだったが、モスクワが占領されてからは都市近郊の農民に宛ててビラの発行が続けられた。9月20日付けのビラは、「卑しいならず者の邪悪な蛇どもを退治せよ、それが済んだらモスクワの皇帝のもとに参上して手柄を自慢するがいい」と農民に対して自発的な戦いを呼びかけている（220）。ところが、10月に入ってフランス軍が撤退すると無法状態になったモスクワには、今度は近郊の農民が獲物を求めて群がり出した。ロストプチンは10月20日のビラで略奪を止めるように呼びかけている。模範的なナロードの像を示すため、ロストプチンは戦争で活躍した民衆を称揚する計画を思いついた<sup>22)</sup>。ロストプチンが提供した情報をもとにして、モスクワ県内の農民・町人・商人身分のなかで自発的にフランス軍と戦った人々の記事が1813年初めの『モスクワ通知』『ロシア通報』などの新聞雑誌に掲載された。ナポレオン戦争における「農民パルチザン」について知られていることの多くはこのときの記事に由来している。たとえばボゴロドスク郡で村人を率いてフランス軍を撃退した農民ゲラシム・クーリン（図4）は、現代ロシアの歴史教科書に登場するほどよく知られているが、その名前もここで初めて紹介されている。1813年5月にはロストプチンの根回しにより、クーリンを含む50人の民衆英雄が勲章やメダルを授与された。非戦闘民の勲功を表彰するような制度がなかったため、特別なメダルが鑄造されたという。

ロストプチンはモスクワの下層民や近郊の農民の愛国心を鼓舞するプロパガンダに積極的に取り組んだが、民衆の愛国心を本気で信じていたわけではなかった。むしろ民衆がナポレオン側の政治宣伝に呼応して反乱を起こすことを強く危惧していた。警察大臣宛の手紙にはロストプチンのそうした本音が透けて見える。「何よりも問題なのは民衆の不満が地主貴族に向かうかもしれないことだ」（7月23日）。貴重なアイコンを搬出せずに都市に残す措置について、「人々の欲求の矛先を敵に向けて暴動を起こさせないためには仕方がない」（8



月 23 日) 23)。

モスクワ総督は配下の警察機構を通して民衆の間に広まる噂や流言を収集していたが、その中にはナポレオンはエカテリーナ 2 世の隠し子として正当な遺産の分け前を請求するためにロシアに来たというものもあった<sup>24)</sup>。8 月 18 日のピラはナポレオン軍と戦うための武器を安価で提供することを民衆に約束し、26 日にはとうとう無料で武器庫が開放される。しかし目撃者の証言によれば、このとき配られた武器の多くは「引き金のない銃や錆びついたサーベル」ばかりだったという<sup>25)</sup>。芝居がかった大げさな演出のわりには、使える武器を手渡すほど住民を信用してはいなかったようだ。



〔図 4〕 ゲラシム・クーリン(スミルノフ、1813 年)

ロストプチンはロシア民衆の言葉遣いに通じる一方で、ネイティブなみのフランス語を操るヨーロッパ的教養人でもあった。政治宣伝の中であれほどフランス文化を攻撃しておきながら、戦後にモスクワ総督の地位を解任されてからはフランスに移り住み、パリの社交界の人気者となっている。ロシアの民衆に関する彼の言説はプラグマティックな嗅覚を持った政治家のそれとして理解するべきだろう。ロストプチンは愛国的な民衆像を作り出すことに寄与する一方で、現実の都市住民や農民を自分と同じロシア国民として信頼することはなかったと思われる。その点で対照的なのは、同じモスクワで活躍したジャーナリストのセルゲイ・グリンカである。彼もまたナポレオン戦争の時代に理想的なナロード像を好んで取り上げたが、ロストプチンとは違ってそうしたイメージを無邪気に信じる傾向があった。

グリンカは1808年のナショナリズム高揚の時期に雑誌『ロシア通報』を発刊し、フランスからの外来文化を批判してロシア固有の伝統を擁護する明確な論調で評判を呼んだ。『シーラ・ボガトウイリョフ』で名声を得たロストプチンと共に、グリンカはモスクワの愛国派を代表する論客となる<sup>26)</sup>。1812年の戦争に際して、『ロシア通報』はビラの一部を掲載するなどしてモスクワ総督と密接な協力関係を保った。グリンカの『ロシア通報』はアレクサンドル・ネフスキー、ドミトリー・ドンスコイ、スヴォーロフ将軍などの歴史的英雄に関する話題を頻繁に取り上げる一方で、ロシアの民衆に関する記事も積極的に掲載した。例えば1808年の第2号では、ヴォロネジ県に凶悪な狼が現れて人々を襲ったことが伝えられている。50余才のある農民は背中に飛び乗った野獣をつかんで、自分もろとも狼を攻撃するよう呼びかけた。幸いにして狼は退治され、農民も一命をとりとめたという。同年の第6号では、徴兵当番がまわってきた農民一家が、身代わりを立てるための費用を提供しようという親切な領主の申し出を断って、大切な息子のひとりを差し出したという逸話が紹介されている。息子を犠牲にした父親は「農民にも高貴な人間はありうる」と賞賛されている。これら二つのエピソードには「市民的アネクトド」という共通のタイトルがつけられており、社会の下層にいる農民を対等な国民として扱おうとするグリンカの意向を反映している<sup>27)</sup>。

『ロシア通報』が取り上げた民衆像の中で後世まで影響を残したのがイヴァン・スサーニンの物語である。17世紀の初頭にロマノフ王朝の始祖となるミハイルが新しい皇帝に選ばれるが、ポーランド人の部隊がその命を狙ってロマノフ家の領地があるコストロマに現れる。ミハイルの居場所を尋ねられた地元の農民スサーニンは教えるのを拒否して殺された。新皇帝ミハイルはスサーニンに感謝してその子孫に免税特権を与える勅書を残している。セルゲイ・グリンカは当時まだそれほど知られていなかったこの逸話を1810年と1812年の二度にわたって『ロシア通報』誌上で紹介した<sup>28)</sup>。1812年にナポレオンの遠征の直前に書かれた『民衆の道徳教育試論』という文章では、雪と森の中にポーランド人を案内して迷わせるというモチーフが付け加えられた。セルゲイの遠い親戚にあたる作曲家ミハイル・グリンカが作曲したオペラ『皇帝に捧げた命』（1836年）によって、スサーニンの物語は帝政ロシアの国家イデオロギーを宣伝するものとして公認される<sup>29)</sup>。オペラに描かれる雪の中で自滅するポーランド人の末路は、冬将軍に追われて敗走するナポレオンのイメージと重ね合わせて理解されたはずである。

セルゲイ・グリンカはスサーニンの歴史的な偉業を民衆教育のための教材として用いるこ

とを考えていた。1810年の『グロミロヴォ村の記念碑』ではユートピアのような理想的農村が描かれる。地主貴族の指導のもとに農民が一致団結してスサーニンの記念碑を建て、イヴァン神父は一同が模範とすべき農民の英雄について物語る。「子供たちにスサーニンの偉業を語り伝えよ」と説教の最後に神父は述べている。雑誌の口絵には農具で装飾されたスサーニン記念碑の想像図が描かれている(図5)<sup>30</sup>。グリーンカは記念碑が字の読めない民衆に与えるであろう教育的効果を重視しており、モスクワの赤の広場に計画されていたミーニンとポジャルスキーの像についてなど、『モスクワ通報』にはしばしば歴史上の人物の記念碑に関する話題が掲載された。先に述べた狼を退治した農民についてさえ、「領主は農民英雄に捧げる記念碑を建てるかもしれない。子孫は彼を模範にして、鋤を手にして農耕に従事し、銃を手にして君主のために戦うことであろう」という希望が述べられている。民衆にロシア国民として相応しい位置付けを与えようとするグリーンカの試みは、理想主義者の夢と批判されても仕方のない点が多かかった。ナポレオン戦争の熱狂が覚めると『ロシア通報』の人気も落ち目となる。農民に対する国民的な教育が本格的に開始されるには、1861年の農奴解放を経て大改革の時代を待たねばならない。しかしグリーンカの言論活動はスサーニンを始めとする民衆英雄のイメージを後代に残すことには成功したと言えるだろう。



【図5】スサーニンの記念碑(1810年)

## ペテルブルグ

1812年の末から1814年にかけてペテルブルグではナポレオンを風刺したカリカチュアが大量に描かれた<sup>31)</sup>。それらの中にはロシアの民衆の活躍をモチーフにした作品も見受けられる。ロストプチンの裁量下で刷られた絵が民衆版画（ルポーク）に近い素朴な様式であったのに対して、ペテルブルグの風刺画家たちは西欧の印刷技術を導入し、イギリスやドイツのカリカチュアの影響を強く受けていた。イヴァン・テレベニョフやイヴァン・イヴァノフ等の代表的なカリカチュア作家は首都の芸術アカデミーで教育を受けている。モスクワではセルゲイ・グリーンカの発行する雑誌『ロシア通報』が長らく反フランス派の言論を代表してきたが、ペテルブルグでもナポレオンの侵略に対抗するため1812年後半に作家ニコライ・グレチが編集長を務める雑誌『祖国の子』が発刊された。そこには付録としてカリカチュアが掲載された他、雑報欄には戦争にまつわる逸話や笑話を紹介され、それらがまた風刺画家たちに着想をもたらした。ナポレオン戦争を題材とするカリカチュアには作家・ジャーナリストと絵師・版画家の共同作業という側面があったと言える。

それでは彼らが描き出したナロードのイメージについて見ていこう。図6はイギリスの風刺画家ローランドソンの作品で、プロイセンの英雄ブリュッヒャー将軍が犬の姿をしたナポレオンを捕まえている。



【図6】 ナポレオンとブリュッヒャー将軍(ローランドソン、1814年)

ところがロシアのテレベニョフが全く同じ構図を使っており（図7）、オオカミに喩えられたナポレオンや、左側で両手を挙げて驚いている将校の姿などは複写とまごうほど類似している。



〔図7〕 農夫とオオカミ(テレベニョフ、1814年)

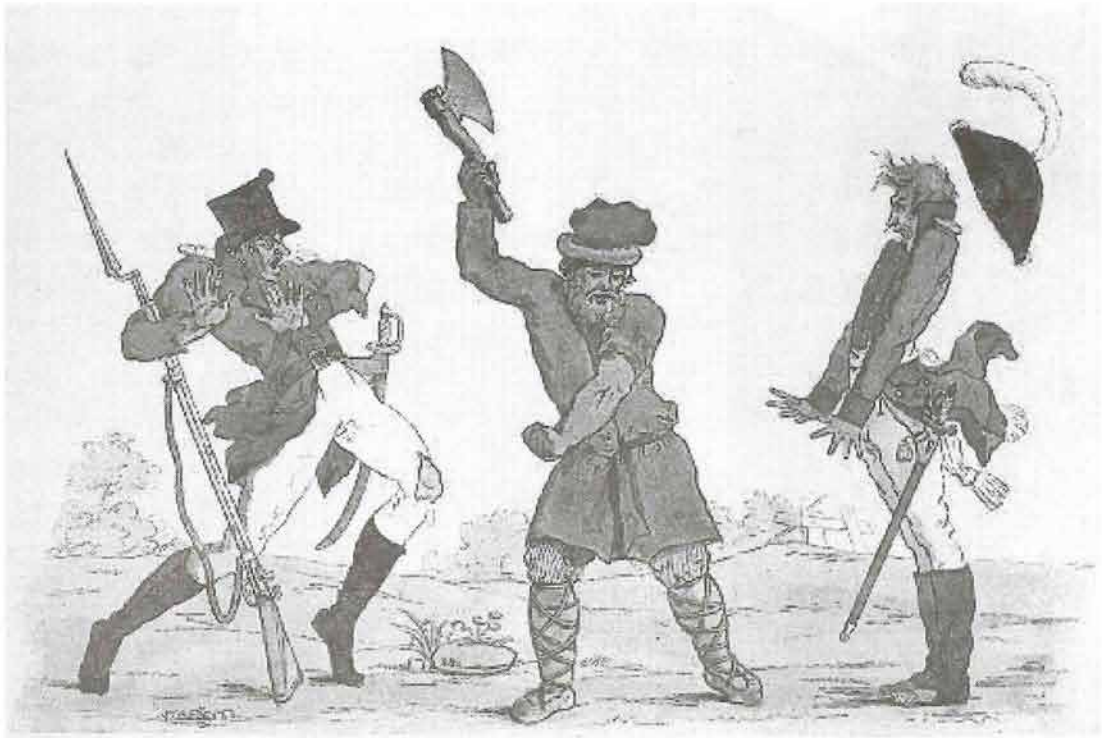
風刺画のジャンルではオリジナリティの尊重といった配慮があまり存在しておらず、以下で紹介する作品にもイギリスやドイツの風刺画を模写したり着想を借りたりしたものが多い。しかし興味深いのはオリジナルに加えられた改変部分である。図6では害獣のナポレオンを退治するのがブリュッヒャーという実在の軍人なのに対して、ロシア版の風刺画ではひげを生やした農民の像になっている。ペテルブルグ産のカリカチュアではナポレオン自身やその部下の元帥たちがしばしば登場する一方で、ロシアの陣営を代表する人物像としてクトゥーフなどの著名なロシアの軍人や皇帝などが描かれることは少なく、むしろ名前のない民衆が活躍することの方が多。

この時代の芸術家の多くは新古典主義の影響を受けており、古代ギリシア・ローマの英雄のモチーフが用いられることがある。図8はルーベンスの描いた古代ローマの英雄スカエウォラである。敵軍の捕虜になった際に自分が拷問を恐れないことを示すために、左手を炎の中に入れて自ら焼いたという偉業で知られている。リビウスの『ローマ建国史』にもその逸話を取り上げられており、古典主義の時代に沢山の画家や彫刻家が作品の題材に選んでいる。先述した雑誌『祖国の子』の1812年第4号には「ロシアのスカエウォラ」という記事が掲載された。フランス軍に捕まったロシアの農民がナポレオンへの忠誠を示す焼き印を腕に押される。すると農民は斧を取り出して自分の腕を切り落としたという話である。実際にあった出来事として書かれているが、もちろんナポレオン軍が捕虜に焼き印を押す習慣を持っていたはずはなく、雑誌に関係した作家たちが捏造した物語だろうと考えられている<sup>32)</sup>。

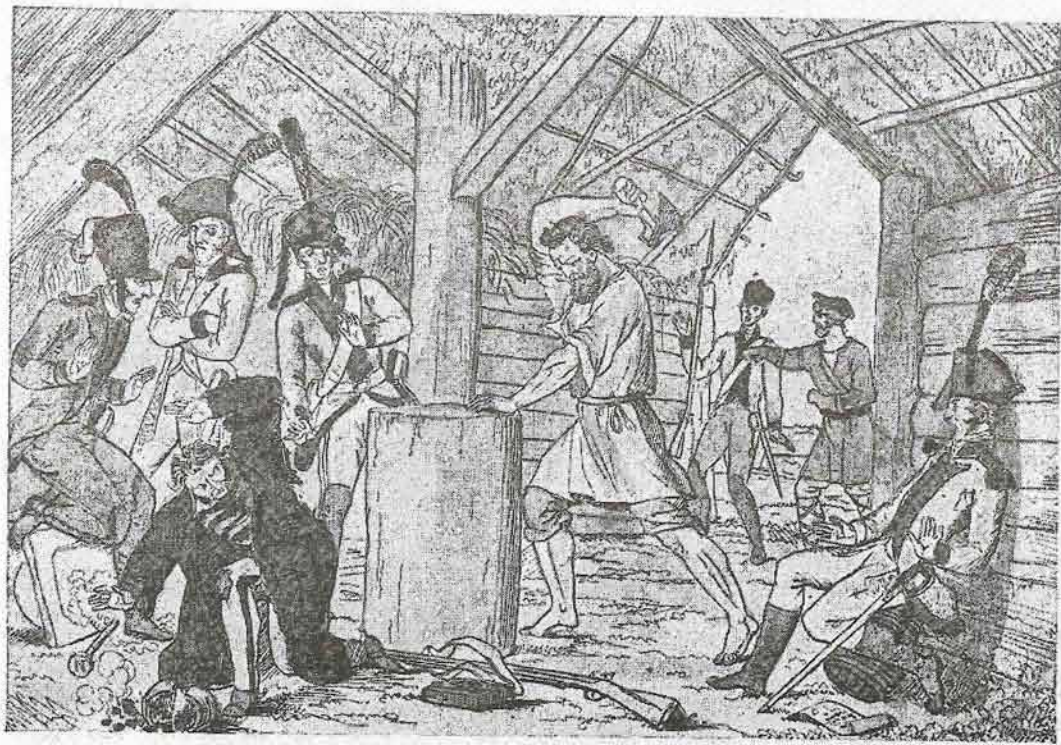


〔図 8〕 スカエウォラ(ルーベンス、1620年)

しかしロシア版スカエウォラのキャラクターは読者の支持を得たらしく、図9・10のように繰り返しカリカチュアの題材にされた。図10の左下の男が手から落としている焼印にはナポレオンを示すNの文字が見える。デムト=マリノフスキーによる彫像も同じ頃に作られた(図11)。彫刻作品になると古典古代のモデルにもどって裸体像になる点が興味深い。図12はヘラクレスに喩えられた巨大な農民がフランス兵を投げ散らしている。ヘラクレスの図像は民衆の象徴としてフランス革命期にしばしば用いられたことが知られているが、ペテルブルグの風刺画家はその伝統をロシアの農民に応用したのであろう。



[図 9] ロシアのスカエウォラ(テレベニョフ、1813年)



[図 10] ロシアのスカエウォラ(イヴァノフ、1813年)



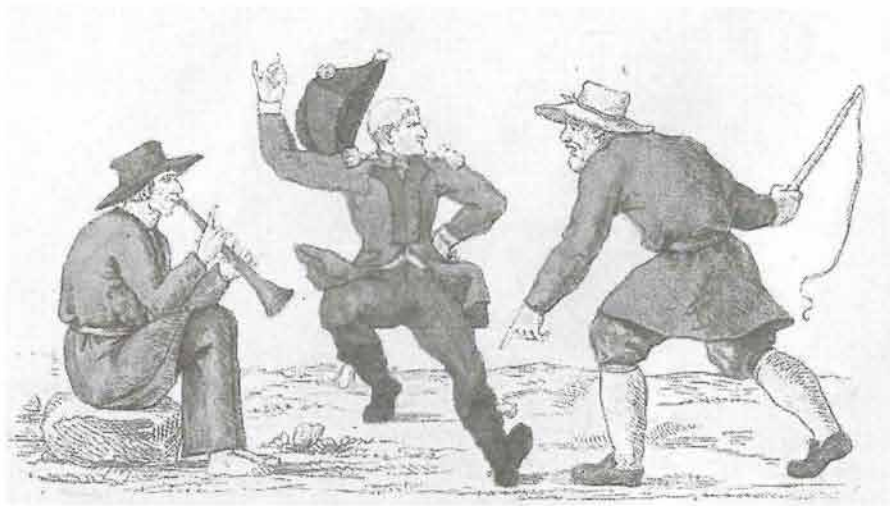
【図 11】 ロシアのスカエウォラ(デムト=マリノフスキー、1813 年)



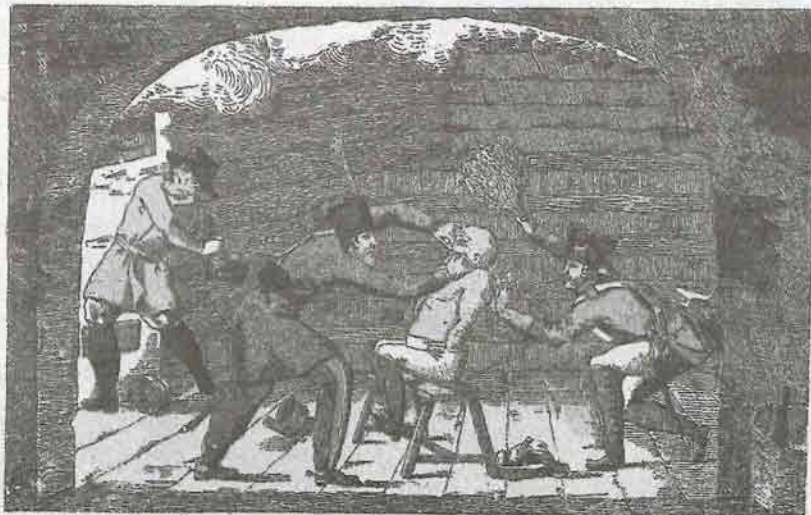
【図 12】 スイチェフ村のヘラクレス(テレベニョフ、1813 年)



ナポレオン戦争期のカリカチュアにおける農民像はしばしばロシア的な文化を体現する存在として描き出された。「ナポレオンのダンス」と題された絵(図13)では、農民たちが笛を吹いたり、むちを振り回したりして、中央にいるナポレオンにロシアの民族ダンスを踊らせている。腰を落として足を交互に前に上げるステレオタイプな動作から分かるように、日本では一般にコサックダンスと呼ばれているものだ。図14はバーニャと呼ばれるロシア風のサウナ風呂が舞台になっている<sup>33)</sup>。半裸でベンチに腰かけさせられているのはナポレオンである。左側にいる農民がペチカ(暖炉)に水をかけ、そこから熱い蒸気が出ているのが見える。右側の兵士は、白樺の枝を干したものでナポレオンの背中をたたいてマッサージし、中央にいるコサックは嫌がるナポレオンの鼻をつまんで、ひげを剃っている。ナポレオン戦争の風刺画の中では、農民とコサックと兵隊という三つのキャラクターがしばしば一組で描かれる。



【図13】 ナポレオンのダンス(テレベニョフ、1813-1814年)



【図14】 ロシア風呂に入るナポレオン(テレベニョフ、1813-1814年)

図 15 の「ナポレオンのロシアでのもてなし」では、同じ三人組がロシアの伝統的な食物をナポレオンにごちそうする。ナポレオンの頭の周りに貼りつけられているのはカラチという輪形のパンで、同じ物が左側の農民の腰にも吊り下げられている。右手の兵士が哀れなフランスの英雄の口に突っ込んでいるのは、プリニャクというレンガ形の糖蜜菓子である。農民がジョッキに注いでいるのはスヴィチェニという蜂蜜で作った温かい飲物だが、彼の持つ樽には「ナポレオンに占領されたモスクワで起きた火事の熱で温められた」と書かれている。ナポレオンのお尻はカルーガ風のパン粥が入った桶に落ち込んでいる。



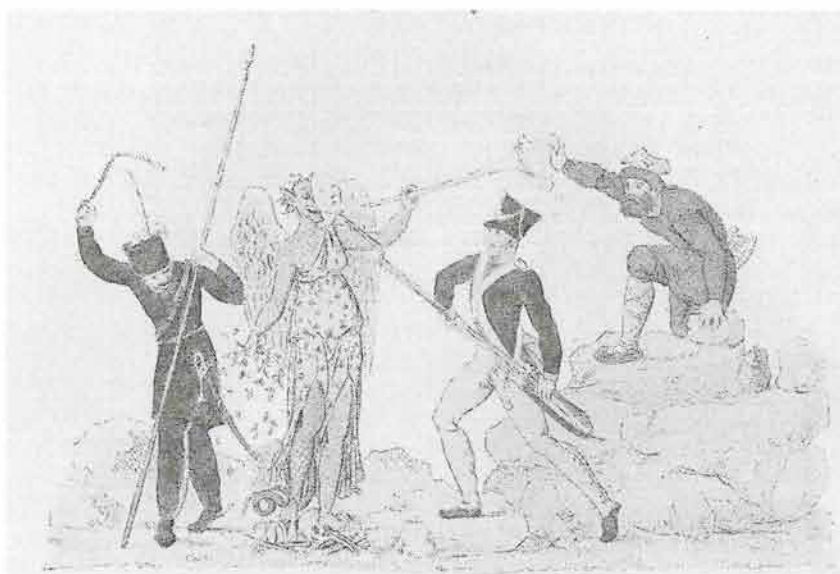
[図 15] ナポレオンのロシアでのもてなし(テレベニョフ、1814年)

民族舞踊、蒸し風呂、食べ物などはロシア的なものを表す文化的な記号であり、農民や兵士などの民衆がその担い手として表現される。ヨーロッパ化されたロシアの貴族がコサックダンスを踊ったりパン粥を食べたりする光景は現実にはありえたものかもしれないが、図像として描かれるほどに典型的なものとは考えられていなかったのであろう。そもそもロシアの貴族がナポレオン戦争期のカリカチュアに登場することはまれである。もし描かれることがあったとしても、敵であるフランスの文化にかぶれた存在という風刺の対象としてである。図 16 では、フランス人の床屋の提供するモードを無批判に受け入れるロシア人貴族が角のように逆立った奇妙な髪型にされてしまう。ヨーロッパの多くの言語では知らないうちに妻を寝取られてしまっている男に対して「頭に角を生やす」という言い回しをするが、それを暗示する髪型ではないかと思われる。



【図16】 フランス人の床屋(ヴェネチアノフ、1813-1814年)

フランス軍を悩ましたロシアの冬の寒さもカリカチュアの格好の題材となった。図17では、おなじみの三人組が「ナポレオンの栄光」を示す人物像と対決する。仮面、月桂冠、ラッパという「栄光」のアレゴリーをコサックと農民と兵士がそれぞれ打ち破るという構図になっている。雪のかたまりをラッパの中に突っ込むという農民のしぐさが冬のロシアでのフランス軍の苦戦を表現していて興味深い。雪を手を持つ農民は、絵に付せられた説明文中で「ヴァヴィラ・マロース」という名前と呼ばれている。ヴァヴィラは現在のロシアではあまり用いられない人名だが、「マロース」は冬の厳しい寒さを意味するロシア語の独特の言葉である。昔話などのフォークロアでは、マロースが人格的な存在として登場することがある。



【図17】 ナポレオンの栄光(テレベニョフ、1813-1814年)

図 18 はヴィクトル・ヴァスネツォフがオストロフスキーの戯曲『雪娘』のために描いた舞台衣装のデッサンである。ソ連時代にはマロースがクリスマスのサンタクロースと融合して、子供達に贈物を配るお爺さんのキャラクターになった。図 19 は民衆版画にしばしば登場するマロースと「鼻」と呼ばれる酔漢の教訓的な物語である。マロースが酒を飲みすぎた男を手に持った棍棒でお仕置きする、すると酔っぱらいの鼻が膨れ上がる。マロースは妖怪や老人など様々な姿で現れるが、図 19 ではナポレオン戦争のカリカチュアで描かれる農民と同じような格好をしている。



【図 18】 マロース爺さん(ヴァスネツォフ、1885年)





【図 21】 ナポレオンの逃亡(イヴァノフ、1813-1814 年)

図 22 はフランスに逃げ帰ったナポレオンが医者診察を受ける滑稽な場面を描いている。ナポレオンの鼻に大きな腫れ物ができており、一方の医者は鼻を切り取ることを主張し、片方の医者がそれは命の保証ができないからやめた方がいいと反対する。面白いことに、鼻が腫れ上がったのはロシアの寒さのせいだと診断されている。図 19 の民衆版画にあったような酔漢がマロースに懲らしめられるという物語のモチーフが、鼻が膨らんだナポレオンを風刺するカリカチュアに用いられたと考えることができよう。雪嵐の中にポーランド人を迷い込ませるスサーニンの物語が後にロシアの国民的オペラになったように、ナポレオン戦争を契機としてロシアの冬景色は民衆英雄のイメージと結びつき、肯定的な意味を帯びるようになる。



【図 22】 ナポレオンがロシアから持ち帰った鼻(テレベニョフ、1813-1814 年)

最後に女性のイメージを取り上げたい。図 23 のように農民の女性がフランスの軍隊と戦うというモチーフがしばしば見られる。先にも述べたように「ナロードの戦争」は下層階級を含めたロシアの全国民の参加ということを前提しているが、本来は非戦闘民であるはずの女性や農民までもが武器を取るという構図はそうしたスローガンをひととき強調するものだったはずである。女性だけでなく、子供・老人・病人といった「国民」の中でも比較的マージナルな存在もまた同じような役割を果たすだろう。ちなみに図 23 に描かれた女性は頭の被り物などで分かるように晴れ着姿をしており、そんな格好で戦闘に参加することは現実にはありえない。カリカチュア画家は農民の戦う場面を実際に見たわけではなく、祭日の風景などに見られるステレオタイプな農村女性のイメージを借りてきたことが予想できる。



[図 23] 農村のバルチザン(マルトウイノフ、1813-1814 年)

戦う女性というイメージにはコミカルな側面もあるように思われる。そもそも農民が畑仕事の道具を振り回して戦うということ自体に、正規軍による標準的な戦闘の光景から逸脱することから生じる滑稽さがある。それが女性の農民であるなら、なおさら滑稽さは強まるだろう。図 24 ではフランス軍兵士の捕虜が老婆と子供によって護送されている。兵隊達はモスクワで奪ったと見られる女物の衣服を着込んでおり、老人や子供と成人男性の力関係がねじれたり、男女の衣装がひっくり返ることが可笑しさを生み出している。



【図 24】スピリドノヴァな婆さんとフランス近衛兵(テレベニョフ、1813-1814年)

図 25 でもフランス兵が農婦たちの捕虜になっている。女性の農民が男性の職業軍人に勝利するというように、やはりステレオタイプな価値観が逆転しており、それがまたカリカチュアに描かれた状況の喜劇性を際立たせる。犬やニワトリまでがナポレオン軍の男性たちを攻め立てている。右側の若い農婦のひとりが飢えた兵隊に向かってカエルを突き出しているのは、「カエル食い」のフランス人を侮蔑するポーズかもしれない。手に大ガマを持って馬上からフランス兵を脅しつけている「女村長ヴァシリーサ」は実在した農民女性で、捕虜となった敵軍兵士を手厳しく遇しながら、ロシア軍の陣営まで護送する役割を果たしたことが知られている。『祖国の子』のジャーナリストに紹介されたり、カリカチュアの題材となることで、ロストプチンが紹介したゲラシム・クーリンと並んでナポレオン戦争におけるナロードの英雄として有名な存在になった(図 26)。



【図 25】ヴァシリーサと飢えたネズミのようなフランス兵(シフリヤル、1812年)





【図 26】 ヴァシリーサ・コジナ(スミルノフ、1813 年)

敵であるフランスの軍隊に対してイメージの上で対決するために、西欧化したエリート貴族ではなく、ロシア的なものを体現するナロードの図像が必要とされた。しかしカリカチュアを政治的プロパガンダと考えるなら、それはあくまで貴族層に対して向けられたものであり、絵の中に描かれた農民のためではなかった。カリカチュアはまず『祖国の子』などの雑誌に掲載され、それから色づけされて一枚絵として売られたが、それらを購入できたのは識字能力があって裕福な貴族、そして都市部の商人や町人の一部でしかなかった<sup>34</sup>。古代ローマの英雄のイメージや「ナポレオンの栄光」のアレゴリーが当時の農民にそのようなものとして理解できたとは思えない。図 23 のよそゆきの衣装で農婦のように現実にはありえないような図像が許容されたのも、貴族たちの目にはそれほどおかしなものとして映らなかったからであろう。非戦闘民である民衆が武器を手にする姿が描かれることにより、全ての国民が団結して敵に対峙したという「ナロードの戦争」の言説は補強される。しかし社会の下層民、農民、女性、子供、老人などが軍人を倒す構図には「あべこべの世界」のユーモアや滑稽さも感じられる。そこにはむしろ貴族と民衆の差異を強調する側面もあったのではないか。このように矛盾点を内に含みながらカリカチュアは戦う民衆英雄のイメージを作り出したのである。

## まとめ

1812年のナポレオンのロシア遠征は「祖国戦争」と呼ばれ、ロシア人の歴史の記憶の中で大きな位置を占めることになる。社会の下層にいる人々にまで「愛国心」が探し求められ、民衆英雄のイメージが創出された。モスクワではロストプチンが民衆語や民衆版画を用いて人々に働きかけ、セルゲイ・グリーンカは『ロシア通報』の中で農民もまた立派なロシア国民でありうることを説いた。ペテルブルグの風刺画家たちはロシアの民衆がナポレオンを撃退する愉快的光景を描き出した。しかしモスクワ総督の政治的扇動は民衆への根本的な不信に基づいていたし、グリーンカの道德教育の理想は肝心の民衆には届かなかった。カリカチュアが民衆ではなく貴族層のために描かれたこともすでに述べた。ナポレオン戦争で創出された民衆英雄のイメージは彼らを国民的な統一性に引き寄せるものである一方で、見る主体である貴族と見られる客体である民衆との間の眼差しの亀裂を露わにするものでもあったと言える。

社会のエリート層である貴族が、勇敢でときには滑稽な民衆英雄のイメージを必要としたのは、「戦う農民」の裏側にある「反乱する農奴」のイメージを恐れていたからであり、またそれを隠蔽するためでもあった。ナポレオン軍に立ち向かう民衆がいたことは事実だが、同じ時期に農奴が地主貴族に反乱を起こす事例も多く見られた。しかし全ロシア国民が一致団結して戦ったという「ナロードの戦争」の言説に圧倒されて見えないものにされていく。一方でナポレオン戦争において描き出された民衆英雄のイメージは、その後の様々な戦争を可視化するために多くの材料を提供することになる<sup>35)</sup>。とりわけ「大祖国戦争」と称された第二次世界大戦（独ソ戦争）では、ナチスドイツによる国土侵略がナポレオンの遠征の記憶をまざまざと蘇らせた。図 27 ではヒトラーの背後にナポレオンの影が映っているが、1812年と書かれた刺又が「ナロードの戦争」を象徴していることは言うまでもない。本論で分析したナポレオン戦争の民衆英雄のイメージが、ソ連や現代ロシアにおいてその文脈や意味合いをずらしながら、様々な戦争の記憶を形成していく点についてはまた別の機会に論じたい。



〔図 27〕 ナポレオンは敗北した。高慢ちきなヒトラーもそうなる(ククルニクスイ、1941年)

註

- 1) Hans Rogger, *National Consciousness in Eighteen-Century Russia* (Cambridge: Harvard UP, 1960)
- 2) Hans Rogger, *National Consciousness...* pp.126-185; 坂内徳明「ロシアにおける民俗学の誕生」『一橋論叢』108-4号、1992年。
- 3) パークによれば「発見」に先立って上層階級がかつては自らも属していた民衆文化から撤退するプロセス(1500-1800年)が見られるはずだが、ロシアの貴族は1800年の時点でもまだ民衆文化の要素を残していたという。本論ではモスクワとペテルブルグという大都市の西欧化した貴族を扱うが、地方に居住する地主貴族の文化については更なる検討が必要であろう。ピーター・パーク『ヨーロッパの民衆文化』人文書院、1988年、350-363頁。
- 4) 19世紀前半のナロード概念の問題点については次の論文が参考になる。今仁直人「ペリンスキーにおける「ナロード」の概念の変容」『ロシア史研究』74号、2004年。
- 5) Yitzhak.Y. Tarasulo, *The Napoleonic Invasion of 1812 and the Political and Social Crisis in Russia* (Ann Arbor:UMI, 1983)
- 6) 詳しくは次の拙稿を参照。越野剛「フョードル・ロストプチンとナポレオン戦争における民衆(ナロード)のイメージ」『ロシア語ロシア文学研究』40号、2008年
- 7) Alexander M. Martin, *Romantics, Reformers, Reactionaries: Russian Conservative Thought and Politics in the Reign of Alexander I* (Northern Illinois UP, 1997) pp.57-73.
- 8) 本論で用いる日付は帝政時代のロシア暦(ユリウス暦)に従う。19世紀の場合は12日を足せば西欧の日付(グレゴリオ暦)と同じになる。
- 9) *Ростопчин Ф.В.* Ох, французы! М.: Русская Книга (Советская Россия), 1992. С.209.以下のビラの引用は()内に頁数を示す。
- 10) ルボークについては次の著書が詳しい。坂内徳明『ルボークーロシアの民衆版画』東洋書店、2006年
- 11) *Ровинский Д.А.* Русские народные картинки, СПб.: Тропа Троянова, 2002. С.232; *Кузьминский К.С.* Отечественная война в живописи // Отечественная война и русское общество, т.5, М., 1912. С.204.
- 12) *Ахметьев М.А.* Фабрика народных картинок Ахметьевых в Москве (1744-1869) // *Данилова И.Е.* (ред.) Мир народной картинки. М.: Прогресс – Традиция, 1999. С.59-86.
- 13) *Снегирев И.М.* О протонародных изображениях // Труды общества любителей Российской словестности, Ч.4, 1824. С.144-145.
- 14) *Захаров И.В.* (ред.) Наполеон в России глазами русских, М.: Захаров, 2004. С.24.
- 15) *Овчинников Г.Д.* И дышит умом и юмором того времени (о литературной репутации Ф. В. Ростопчина) // Русская Литература, №1, 1991, С.153.
- 16) *Вяземский П.А.* Воспоминания о 1812 году // Русский архив. 1869. С.185.
- 17) Alexander Martin, *Romantics, Reformers...* p.131.
- 18) *Тартаковский А.Г.* Обманутый Герострат. Ростопчин и пожар Москвы // Родина, №6-7, 1992. С.88-93.
- 19) *Дубровин Н.Ф.* (сост.) Отечественная война в письмах современников (1812-1815 гг.), М., 2006. С.76, 94.
- 20) *Ростопчин Ф.В.* Правда о пожаре Москвы // Сочинения. СПб., 1853. С.212-215.
- 21) *Загоскин М.Н.* Рославлев, или Русские в 1812 году // Сочинения в двух томах. М., 1987. Т.1. С.483.
- 22) *Бартошевич В.В.* Из истории награждения крестьянских партизан 1812 г. // Исторические записки, №103, 1981. С.299-324.
- 23) *Дубровин Н.Ф.* Отечественная война в письмах... С.62, 109.
- 24) ロストプチン自身の回想記による。 *Ростопчин Ф.В.* Ох, французы! С.277.
- 25) *Мельгунов С.П.* Ростопчин – Московский главнокомандующий // Отечественная война и русское общество, М., 1912. Т.4.С.62-64.
- 26) Alexander Martin, *Romantics, Reformers...* pp.73-84.
- 27) Русский вестник. 1808. №2. С.206-208. №6. С.315-319.
- 28) Русский вестник. 1810. №10. С.3-15; 1812. №5. С.72-94.
- 29) *Киселева Л.Н.* Становление русской национальной мифологии в николаевскую эпоху (сусанинский сюжет) // Лотманский сборник, Т.2. М., 1997. С.279-302; Thomas Hodge, "Susanin, two Glinkas, and Ryleev: History Making in A Life for the Tsar" in Andrew Wachtel (ed.) *Intersections and Transpositions: Russian Music, Literature, and Society* (Northwestern UP, 1998) pp.3-19.

- 30) グリンカが空想した図版とは違う形ではあるが、1851年にコストロマ市で実際にスサーニンの記念碑が建てられた。
- 31) ナポレオン戦争期のカリカチュアについては主に以下のような先行研究がある。*Кузьминский К.С. Отечественная война в живописи // Отечественная война и русское общество, т.5, М., 1912. С.192-225; Денисов В. Война и лубок, Петроград, 1916; Черкесова Т.В. Политическая графика эпохи Отечественной войны 1812 года и ее создатели // Русское искусство XVIII – первой половины XIX века, М., 1971. С.11-47.*
- 32) *Черкесова Т.В. Политическая графика... С.16.*
- 33) バーニャに関しては次のような専門書が邦訳されている。リピンスカヤ『風呂とペチカーロシアの民衆』齋藤君子訳、群像社、2008年
- 34) *Кузьминский К.С. Отечественная война в живописи... С.217-224.*
- 35) ナポレオン戦争からクリミア戦争、日露戦争、二度の世界大戦まで視野に入れた研究として次のものがある。Stephen M. Norris, *A war of images : Russian popular prints, wartime culture, and national identity 1812-1945* (Northern Illinois University Press, 2006)